Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-23

親子の情緒的関係性と実際の交流からみた反抗期についての一考察

野村，有輝

(Citation)
神戸大学発達・臨床心理学研究,13:32-37

(Issue Date)
2014-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81008868

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008868

親子の情緒的関係性と実際の交流からみた反抗期についての一考察

A study of the second period of rebelliousness from the perspective of emotional relation and actual interchange between parents and children

野村 有輝*

Yuki NOMURA*

要約：本研究では，親子の情緒的関係性と親子での実際の交流の程度が反抗的な感情の生起や反抗的行動の表出に与える影響について検討することを目的とし，中学生１年生から３年生までの 148 名(男子 80 名，女子 68 名)を対象に，反抗の様子(反抗感情・反抗行動)について観測する尺度，親子の情緒的な関係性を測定する尺度，親との実際の交流の程度を測定する尺度を実施した。まず，基礎的研究として，協力者の性別，学年，両親の性別別での反抗の程度の差異を検討した。その結果，中学２年生が一番反抗の表出が高く，また母親に対する反抗において男子が高いなど，先行研究を支持する結果となった。親子の情緒的関係性と実際の交流の程度が反抗に与える影響についての検討では，情緒的関係性が反抗感情と直接的な負の関連を示し，さらに反抗感情は反抗行動と正の関連を示した。また親との実際の交流の程度は，反抗感情・反抗行動のどちらにも関連を示さなかったが，親子の情緒的関係性と中程度の相関がみられた。以上から，親子の情緒的関係性が良好になると，反抗的感情の生起を抑制し，結果として反抗的な行動の表出を抑制することが示唆された。また，交流が増加すると，情緒的関係性が良好になる傾向があり，間接的に反抗感情の生起や反抗行動の表出に影響を与えることを示唆する知見が得られた。

１．問題・目的

思春期とは，第二次性徴を通じて，身体的変化が及ぶ時期をさす。第二次性徴に先立って，平均的には，小学校高学年ごろから身長・体重が急速に成長する傾向がある。これらを含めた身体的成長が思春期の大きな特徴であると言える。また思春期には，身体的成長に伴い，認知能力の向上や，ホルモン機能のアンバランスさが現れるのも特徴である。思春期のこういった成長は，自我の成長，心理的離乳といった心理的な変化に影響を与えたり，両親や友達，周囲の人などとの対人関係を中心に社会的な変化が多くの場合起こりうるといわれている（山本，1999）。特に社会的変化において，その一つに，両親との関係性の変化である第二反抗期（以下，反抗期）がある。反抗期はどの子どもも通る時期であり，子どもにとって必要なものあるという認識が広くあった。しかし，近年反抗期を示さない子どもの増加が問題視されている(小野寺, 2008)。

反抗期について，親子関係に着目した研究がある。そういった親子関係には，二つの分類ができると考えられる。一つは親子関係の情緒的な側面を扱ったものである。たとえば白井(1997)は，親子関係とコンフリクトについての関連性を示している。親子間のコンフリクトとは，「何らかの問題行動の前兆」，「非行・問題行動の生起と関連がある」ものとして述べられており，こういったコンフリクトは，情緒的な親子関係があれば，思春期になっても必ずしもおこるものではないと述べている。また落合・佐藤（1996）の研究では，思春期・青年期における発達段階を５段階にわけた。中学生は，親が子を守ろうとする関係にあるが，自我の成長，関係性の変化が起こっている思春期にある子どもにとって，親からの干渉が反抗的態度に結びつくことが容易に想定できる。

以上のほかにも，親子関係の情緒的側面に着目した研究はあるが，実際の交流の頻度について着目した研究は少ない。

しかし，実際の交流の程度が関係性に与える影響については先行研究が存在する。例えば，上野・鈴木(1994)は父親と挨拶する，話し合うなどのコミュニケーションの時間が長いほうが，子が父親を頼りにする傾向があることが示唆されている。また梁・久和(2006)は，中年期女性と母親の関係性において，実際に母親と過ごす時間が母親にサポートを与えたり，求めたりという心理的な距離に影響を与えることを示唆している。

以上のように，親子関係において，情緒的な関係性の側面の以外にも，実際の交流の程度が与える反抗への影響が考えられる。しかし，これまでの研究では，その点において十分な検討がされていないといえる。

したがって本研究では，親子関係の情緒的な側面に加え，実際の

＊　神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程前期課程

交流の程度が反抗の様相に与える影響について検討する。

また，基礎的検討として，性別，学年，両親の性別において反抗の様相に差があるかという点についても検討を行う。

2．方法

調査時期　2012 年 12 月

調査対象者　関西の中高一貫の国公立大学付属中学の 1 年生から 3 年生までに実施しました。回答に不備のない 148 名（男子 80 名，女子 68 名）を分析対象とした。

実施手続き　各クラスで授業時間に,養護教諭の協力のもと実施。プライバシーの保護，調査以外の不使用,また倫理的な配慮から，アンケートに際して苦痛を感じる場合は回答しなくてよいことを紙面上と口頭にて説明した。

質問紙

質問紙には以下の尺度を用いた。また，それぞれの尺度において，中学生に理解できるように，適宜質問文を訂正した。

フェイスシート：学年・性別

反抗の様子について：須崎（2008）の反抗感情・反抗行動尺度を使用。日常で感じる反抗的な感情を聞いた項目（16 項目）と，実際にどの程度反抗的な行動をとるかを聞いた項目（9 項目）の計 25 項目。5 件法で実施。各項目は Table 1 に示す。

Table 1 反抗感情尺度（1-16）・反抗行動（17-25）

反抗感情
1. 親の考えは古いと思う
2. 親や規則にしばられたくないと感じる
3. 親の嫌なところばかり目がつく
4. 親と一緒にいたくない
5. 親が自分の友人や好きなものを悪く言うと腹が立つ
6. 親が，わたしを思い通りにしようとしているのではないかと思う
7. 親に口出しをされるとイライラする
8. 親を心の中でばかにしている
9. 親を尊敬できない
10. 親をうっとおしいと感じる
11. 親からかけられる期待がつらい
12. 親はわたしの気持ちをわかっていないと思う
13. 親の思い通りになりたくない
14. 親の考え方に疑問を感じる
15. 親の言うことにおかしなことがあると許せない
16. 親は自分にとってじゃまな存在である

反抗行動
17. 親と一緒に外出や旅行はしたくない
18. 親の命令を無視する
19. 親と同じ場所にいることが嫌なので，自分の部屋などにすぐ移動する
20. 親の質問に対して，「別に」「何も」といった一言だけしか返事しない
21. 学校のことなどを親に話さなくなった
22. 親の命令に口答えする
23. 親との約束より友人との約束を選ぶ
24. 親への秘密が増えた
25. 親に腹が立ち，家の中にあるものに，八つ当たりする

親子の情緒的関係性について：北村(2011)の親子関係認知尺度を使用。親からの「受容」感を聞いた項目(7 項目)，親から「尊重」されているかどうかを聞いた項目(7 項目)，親から「制限」を受けているかどうかを聞いた項目(4 項目)のそれぞれを子どもの認知において測る計 18 項目。5 件法で実施。

親との実際の交流の程度：厚生労働省が行った平成 21 年度全国家庭児童調査で使用された項目を使用。具体的な行動を示した 18 項目について，現学年になってから，どの程度母親または父親と一緒に行っているのかを聞いた。18 項目中 2 項目は 5 件法で，その他は 4 件法で実施。

3．結果・考察

・協力者の性別・学年・両親の性別による得点差の検討

協力者の性別と学年，両親の性別を独立変数，反抗感情・反抗行動を従属変数としてそれぞれについて三要因分散分析を行った(Table 2)。その結果，反抗感情では 2 次，1 次の交互作用，また単純主効果についてそれぞれ有意差が見られなかった。次に反抗行動について分析を行った(Table 3)。結果は 2 次の交互作用は見られなかったものの，学年と両親の性別($F(2,148)=3.11, p<.05$)，協力者の性別と両親の性別($F(1,148)=6.13, p<.05$)の 1 次の交互作用が見られた。

Table 2 反抗感情 ： 両親の性別，学年，性別を用いた三要因分散分析の分析表

	平方和	自由度	平均平方	F値
学年	6.73	2	3.37	2.82
性別	1.99	1	1.99	1.67
学年×性別	.48	2	.24	.20
誤差	169.38	142	1.19	
両親の性別	.12	1	.11	.39
学年×両親の性別	1.41	2	.71	2.45
性別×両親の性別	1.06	1	1.06	3.68
学年×性別×両親の性別	.49	2	.25	.86
誤差	40.90	142	.29	

n=148

Table 3 反抗行動：両親の性別，学年，性別を用いた三要因分散分析の分析表

	平方和	自由度	平均平方	F値
学年	11.66	2	5.83	5.67 **
性別	6.47	1	6.47	6.29 *
学年×性別	1.31	2	.66	.64
誤差	145.85	142	1.03	
両親の性別	.17	1	.17	.76
学年×両親の性別	1.37	2	.69	3.11 *
性別×両親の性別	1.35	1	1.35	6.13 *
学年×性別×両親の性別	.73	2	.36	1.65
誤差	31.26	142	.22	

n=148　　$P^{*}<.05$　$P^{**}<.01$

次にそれぞれについての単純主効果の検定を行った。まず学年と両親の性別の単純主効果の検定を行った(Table 4)。まず各学年における両親の性別の単純主効果を検討したところ，有意差は見られなかった。次に両親の性別における学年の単純主効果を検討したところ，母親に対する反抗行動において有意差が見られた($F(1,148)=6.26, p<.01$)。その後の多重比較では，2 年生と 1 年生の間に 1%水準, 2 年生と 3 年生の間に 5%水準で有意な差が見られた(Figure 1)。また，父親に対する反抗行動については，1 次の交互作用が見られなかったものの，その後の多重比較では，2 年と 3 年の間に有意な差が見られた。つまり，2 年生は多学年よりも母親に対する反抗的な行動をとる傾向があるということが示唆された。また父親に対する反抗に関して，3 年生よりも 2 年生のほうが有意に反

抗的な行動をとることが示唆された。

Table 4 学年と両親の性別による１次の交互作用における単純主効果の検討とその後の多重比較の結果

		学年			主効果	多重比較
		1年生	2年生	3年生	学年	
	(*n*)	(35)	(57)	(56)	*F*値	
両親の性別	父親	2.08	2.35	2.00	3.01	2年生＞3年生
		.97	.81	.70		
	母親	1.87	2.42	2.06	6.26**	2年生＞3年生 2年生＞1年生
		.65	.88	.79		
主効果	両親の性別 *F*値	3.60	.57	.58		

上段：平均値　下段：標準偏差　　$p^{**}<.01$

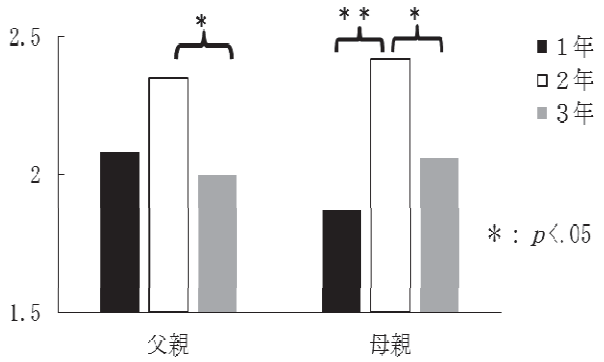

Figure 1　両親の性別における学年の多重比較結果

次に，協力者の性別と両親の性別の１次の交互作用の単純主効果の検定を行った(Table 5)。まず各性別における両親の性別の要因の単純主効果を検討したところ，有意差は見られなかった。次に両親の性別における協力者の単純主効果を検討したところ，母親に対する反抗行動において，1%水準で有意差が見られた(Figure 2)。つまり女子よりも男子のほうが母親に対する反抗的な行動をとる傾向があるということが示唆された。

Table 5 協力者の性別と両親の性別による１次の交互作用における単純主効果の検討とその後の多重比較の結果

		性別		主効果	多重比較
		男子	女子	性別	
	(*n*)	(80)	(68)	*F*値	
両親の性別	父親	2.23	2.06	1.69	
		.76	.89		
	母親	2.33	1.94	9.71**	男子＞女子
		.81	.79		
主効果	両親の性別 *F*値	1.92	2.20		

上段：平均値　下段：標準偏差　　$p^{**}<.01$

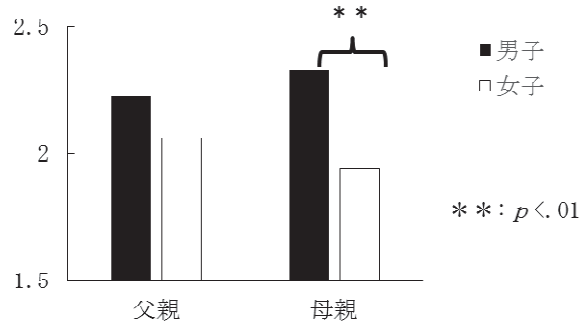

Figure 2 両親の性別における協力者の性別の多重比較結果

・親子関係の情緒的側面と実際の交流の程度が反抗感情・反抗行動に与える影響

反抗の対象として父親・母親のそれぞれについての共分散構造分析，並びに性別による多母集団同時解析を行った。まず基礎統計量として，Table 6 には各尺度の男女別の平均値及び標準偏差，Table 7 には各尺度間の相関を示した。

Table 6 各尺度の男女別平均値および標準偏差

	男子		女子	
	M	*SD*	*M*	*SD*
父親受容	3.55	(1.02)	3.47	(1.06)
父親尊重	3.76	(.86)	3.72	(.93)
父親制限	3.64	(.96)	3.56	(.89)
父親反抗感情	2.40	(.86)	2.36	(.90)
父親反抗行動	2.23	(.76)	2.06	(.89)
父親交流	2.56	(.72)	2.61	(.78)
母親交流	2.67	(.69)	3.10	(.67)
母親受容	3.76	(.91)	3.96	(.78)
母親尊重	3.73	(.85)	3.89	(.76)
母親制限	3.72	(.82)	3.86	(.64)
母親反抗感情	2.50	(.92)	2.25	(.77)
母親反抗行動	2.33	(.81)	1.94	(.79)

Table 7　男女別の各尺度間の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 父親受容		.81 **	.54 **	-.56 **	-.55 **	.56 **	.27 *	.48 **	.37 **	.22	-.28 **	-.19
2. 父親尊重	.83 **		.41 **	-.60 **	-.54 **	.62 **	.37 **	.51 **	.61 **	.12	-.42 **	-.25 *
3. 父親制限	.33 **	.19		-.11	-.19	.40 **	.18	.33 **	.25 *	.63 **	-.13	-.08
4. 父親反抗感情	-.77 **	-.70 **	-.14		.73 **	-.40 **	-.33 **	-.43 **	-.42 **	-.12	.75 **	.52 **
5. 父親反抗行動	-.72 **	-.68 **	-.23	.79 **		-.41 **	-.24 *	-.37 **	-.33 **	-.05	.54 **	.70 **
6. 父親交流	.59 **	.55 **	.30 *	-.51 **	-.51 **		.72 **	.34 **	.36 **	.10	-.31 **	-.20
7. 母親交流	.28 *	.30 *	.21	-.21	-.36 **	.67 **		.53 **	.53 **	.27 *	-.50 **	-.40 **
8. 母親受容	.55 **	.46 **	.28 *	-.30 *	-.47 **	.20 *	.44 **		.85 **	.49 **	-.71 **	-.58 **
9. 母親尊重	.50 **	.69 **	.14	-.29 *	-.41 **	.32 **	.42 **	.75 **		.40 **	-.71 **	-.55 **
10. 母親制限	.36 **	.32 **	.50 **	-.25 *	-.30 *	.43 **	.26 *	.29 *	.14		-.32 **	-.27 *
11. 母親反抗感情	-.37 **	-.38 **	-.03	.44 **	.46 **	-.15	-.35 **	-.60 **	-.63 **	.08		.76 **
12. 母親反抗行動	-.31 **	-.32 **	.03	.33 **	.61 **	-.19	-.44 **	-.60 **	-.56 **	-.01	.79 **	

*：p <. 05　**：p <. 01　　上段：男子　下段：女子

本研究において，親子関係における情緒的側面と，両親との実際の交流の程度が，それぞれ直接的に反抗的感情や反抗的行動に影響を与えていると考えた。そのため，情緒的関係性については，下位尺度である，親からの「受容」・「尊重」・「制限」の 3 つからなる潜在変数の「情緒的関係」を用い，実際の交流の程度については，観測変数を用いて，それぞれ「反抗感情」「反抗行動」の及ぼす影響を検証するモデルを構成した。

まず父親に対する反抗についての共分散構造分析を行った(Figure 3)。適合度は，GFI=.947，　CFI=.980，AGFI=.862，RWSEA=.065 の比較的良い値が得られた。モデル内の数値において男女間の有意差は見られなかった。

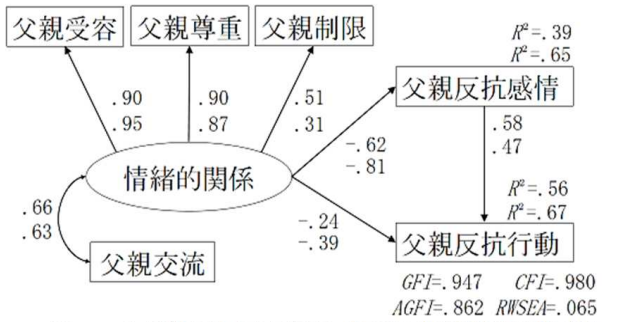

Figure 3 父親に対する反抗についての共分散構造分析結果
(上段：男子，下段：女子，図中全て5%水準で有意，誤差項は省略)

まず男子の父親に対する反抗についてのモデルでは，情緒的関係は父親への反抗感情，反抗行動に負の関連を示した。実際の交流は父親への反抗感情，反抗行動とは関連を示さなかった。また情緒的関係と実際の交流との間には相関関係が認められた。

次に女子の父親に対する反抗では，男子と同様に，情緒的関係は父親への反抗感情，反抗行動に負の関連を示した。実際の交流は父親への反抗感情，反抗行動とは関連を示さなかった。また情緒的関係と実際の交流との間には相関関係が認められた。

まず，実際の情緒関係は，反抗感情を媒介として反抗行動との間に負の関連を示しただけでなく，反抗項行動との間に直接的な負の関連を示した。父親への反抗感情と反抗行動の重相関係数の平方の値は中程度あり(反抗感情：男子R²=.39, 女子R²=.65, 反抗行動: 男子R²=.56, 女子R²=.67)，情緒的関係性が反抗の様相を左右する要因の一つとして示唆された。パス係数の値から，親子間の情緒的関係性が良好であると，父親への反抗的な感情が抑制される傾向があり，また反抗的な感情の抑制により，反抗的行動の表出が抑えられていることが考えられる。また父親との交流と情緒的関係の間の相関係数の値は高い(男子: r =.63，女子; r =.66)ため，実際の交流が多いほど，情緒的関係性が良好となる傾向があると示唆され，それにより，間接的に反抗的感情や反抗的行動を抑制する要因になりうると考えられる。

次に，母親に対する反抗の共分散構造分析を行った(Figure 4)。適合度は，GFI=.952，　CFI=.985，AGFI=.873，RWSEA=.054 の比較的良い値が得られた。

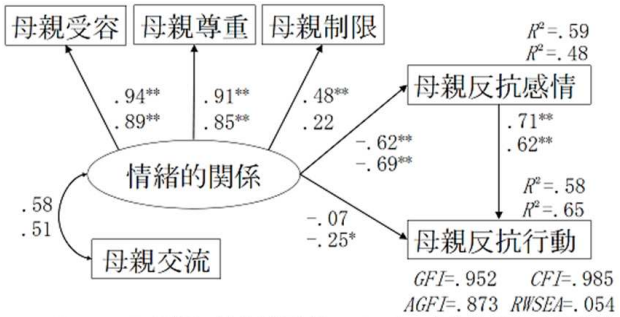

Figure 4 母親に対する反抗についての共分散構造分析結果
(上段：男子，下段：女子，*… p <. 05 **… p <. 01，誤差項は省略)

まず男子の母親に対する反抗についてのモデルでは，情緒的関係は母親への反抗的感情に負の関連を示した。実際の交流は母親への反抗感情，反抗行動とは関連を示さなかった。また情緒的関係と実際の交流との間には相関関係が認められた。

次に女子の母親に対する反抗では，男子とは異なり，情緒的関係は母親への反抗感情に加えて反抗行動にも負の関連を示した。実際の交流は父親への反抗感情，反抗行動とは関連を示さなかった。また情緒的関係と実際の交流との間には相関関係が認められた。

以上から，男女ともに，情緒的関係は，反抗感情を媒介として反抗行動との間に負の関連を示した。母の反抗感情と反抗行動の重相関係数の平方の値は中程度あり(反抗感情：男子R^2=.59，女子R^2=.48，反抗行動: 男子R^2=.58，女子R^2=.65)，情緒的関係性が反抗の様相を左右する要因の一つとして示唆された。パス係数の値から，親子間の情緒的関係性が良好であると，母親への反抗的な感情が抑制される傾向があり，また反抗的な感情の抑制により，反抗的行動の表出が抑えられていることが考えられる。それに加え，女子の場合，男子と異なり母親との情緒的関係性が少なからず反抗的行動に直接的に影響を与えており，さらに母娘の情緒的な関係性には制限よりも母親からの受容感や尊重されている認識が重要であることが示唆された。また母親との交流と情緒的関係の間の相関係数の値は高い(男子: r =.58，女子; r =.51)ため，実際の交流が多いほど，情緒的関係性が良好となる傾向があると示唆され，それにより，間接的に反抗的感情や反抗的行動を抑制する要因になりうると考えられる。

4．総合考察

本研究では，基礎的研究として協力者の性別，学年，両親の性別の違いにおける反抗の表出の差異，また親子の情緒的関係と実際の交流が反抗的感情の生起，反抗的行動の表出とどのように関連するかを検討してきた。

その結果，まず前者では，両親の性別に関わらず，2年生で一番反抗的な感情が高まることが示唆された。これは，一般的な反抗のピークが中学2年生の時が一つの指標になるという小沢(1991)の指摘と一致する。また，母親に対して男子のほうが反抗を示しやすいという結果が示唆された。これは女子のほうが男子よりも母親に対して依存性，親密性が高く(小高，2008：渡邉，1994)，情緒的関係が良好なために結果として反抗的行動の表出が抑制されたと考えられる。

次に親子の情緒的関係は反抗感情を媒介として反抗的行動の表出と負の関連を示した。また実際の交流は反抗感情や反抗行動に関連がみられなかったが，情緒的関係性と中程度の相関が示された。

以上より，反抗的行動の表出に影響を与える要因としては，従来の研究が親子の情緒的関係性に着目してきたように，子が持つ親に対する認知が考えられる。親子の情緒的関係性が良好であると，反抗的な感情が抑制され，結果としては反抗的な行動の表出を抑えることが示唆された。また，親子間の交流があると，それに伴って情緒的関係性が良好となり，結果として間接的に反抗の表出に影響を与えることを示唆する知見も得られた。

また，父子の場合と母娘の場合，情緒的関係性が直接的に子の反抗感情だけでなく，反抗行動にも影響するという結果になったが，母息子の場合，情緒的関係性が直接的に影響を与えるのは反抗感情のみであった。つまり，中学生の母息子間においてのみ，情緒的関係性が反抗的行動に直接的に影響を示さなかった。

この結果に関して，子どもが持つ親に対する認知が影響していると考えられる。松井(2001)の研究では，中学生の男子では父親に対して「尊敬している」「父のようになりたい」という認識が女子に比べ強いことを示し，女子は「言うことは何でも聞く」という認識が強いことを示している。このことから，情緒的関係性が高いほど，こういった認識を強く持ち，男子は尊敬する父親に従うように，女子は父親に対して反抗する必要性が少なくなるために，今回の結果のようになった可能性が考えられる。また，母親に対しては，女子は「何かと相談する」「うまくいっている」という認識をもつ傾向が見られた。このことから，情緒的関係性が高まると，こういった認識を強く持つために，女子では母親との親和性を高めるために反抗的行動が減るという結果に至ったと考えられる。しかし，男子は母親に対して「あまりかまわない」という認識を持つ傾向があることが明らかにされた。そのため，反抗行動を示す以前に母親との交流が減り，情緒的関係性が与える反抗的行動への影響が少なかったのではないかと考えられる。ただ，本研究では，多様な親子関係について限定した側面で測定しているため，今回の結果に影響するような要因について言及できていない可能性がある。そのために，今後の研究ではより多面的に親子関係を捉えていくことが必要である。

以上を踏まえ，今後の研究課題として，反抗の対象としては，親だけではなく，学校の先生など周囲の大人や社会全般に向けられることが考えられる。そのため，反抗の対象を親だけに限定するのではなく，親以外に対する反抗の表出についても明らかにすることが必要である。また，本研究では，反抗的な行動の表出や反抗的な感情に影響する要因を検討したことにとどまり，反抗期を迎えることが思春期の子どもの成長にいかに影響を与えるのかということには言及していない。そのため，今後は反抗期が成長に与える影響も含めて研究を進めることが必要であると考えられる。

5．参考文献・引用文献

北村美緒 (2011). 枠の設定に着目した親子関係尺度作成の試み　学習院大学人文科学論集，**20**，153-169.

松井　洋（2001）．日本の中学生の親子関係　川村学園女子大学研究紀要，**12,** (1), 171-180.

小高　恵（2008）．青年の親への態度についての発達的変化―心理的離乳過程のモデルの提案―　太成学院大学紀要, **10**, 31-48.

小野寺敦子(2008)　第二反抗期の喪失が男の子にもたらすもの　児童心理，**62**，342-346.

落合良行（1995）．心理的離乳への5段階過程仮説　筑波大学心理学研究，**17**，51-59.

落合良行・佐藤有耕（1996）．親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究，**44**，11-22.

小沢一仁（1991）．　親への反抗と青年期の心理的離乳：親への反抗チャートと心理的離乳尺度との関連　帝京学園短期大学研究紀要，**4**，47-55.

白井利明（1997）．特集　若者のこころに迫る―今，第二反抗期は？―ジェンダーの観点から見た第二反抗期―青年心理学の観点からみた「第二反抗期」　心理科学，**19**，9-24.

須崎暁也（2008）．現代の青年における第二反抗期　神戸大学発達科学部人間形成学科卒業論文（未刊行）.

上野顕子・鈴木敏子（1994）中学生の親子のコミュニケーションの実態と背景－中学校技術・家庭の新設「家庭生活」領域の「家庭の生活」の題材設定に向けて－　横浜国立大学教育紀要, **34**, 96-106

渡邊恵子（1994）．自立と自己の性の受容（3）―性差・発達差の検討，日本女子大学紀要. 人間社会学部，**4**，261-275.

山本　晃（1999）．青年期のこころの発達　第１報―情緒・知的障害の観点から―　大阪教育大学障害児教育研究紀要, **22**, 25-37.
梁　明玉・久和佐枝子（2006）．中年期女性の親子関係：サンドイッチ世代における２つの親子関係の規定要因　御茶ノ水女子大学子ども発達研究センター紀要，**3**，141-146
度会哲賢（2011）．平成 21 年度全国家庭児童調査の概要　雇用均等・児童家庭局総務課
http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001yivt.html
（2011 年 12 月 22 日）